

アジア建築家を総括する アジア建築家評議会(アルカシア)

国広ジョージ (2011-12アルカシア会長・JIA国際交流委員会委員・JIA前副会長)

現在JIAでは、2018年アルカシア大会の日本招致を考えています。そのためには今年7月末までに申請資料の作成・提出が必要です。会員の皆様にはご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

今号では、2011～12年にアルカシア(アジア建築家評議会)会長を務めた国広ジョージさんに、アルカシアとは何か、またその活動について解説していただきます。

● アルカシアとは？

Architects Regional Council Asia(アジア建築家評議会)は通称ARCASIAと呼ばれている。日本でも「アルカシア」という通称で知られるアジア諸国の建築家協会19カ国で組織された国際地域団体である。1967年にアジアの旧英国植民地であったシンガポール、香港、インド、マレーシア、パキスタン、スリランカの建築家協会が、CAA(Commonwealth Association of Architects)大会においてアジア地域を中心に環境・技術促進センター(CETA)の設立を提案したことが発端となり、1969年に第1回設立評議会が香港で開催された。さらに、1972年の第3回設立評議会にはバングラデシュ、タイ、インドネシア、フィリピンが参加し、CAAの枠を超越したアジア地域団体が始動し始めた。

その後、設立評議会によりアルカシア、およびアルカシア教育委員会の規約の制定が協議され、10周年を迎えた1979年にアルカシアが正式に承認され、ここに発足の準備が整った。そして、1980年8月、バンコクにおいて第1回アジア建築家評議会(アルカシア)が開催され、初代会長には香港のロナルド・ブーン氏が選出された。毎年開催されるアルカシア評議会は加盟団体によって編成され、各国は教育委員会をはじめとする各委員会に委員を送ることが義務付けられている。

一方、日本はJIAによって代表され、1991年に開催された第12回評議会において正式にアルカシアメンバーとなった。日本はアジアの主要国でありながら、アジア地域を代表するアルカシアに加盟するまで20年余りの歳月を要したのである。

そこには、戦後のアジアとの距離感が存在したと言われる。双方がその距離感を短縮するには、1987年に設立されたJIAが率先して国際活動を展開するまで一時を要したのである。

そのアルカシアと日本との関係を樹立したのは長島孝一氏である。長島氏はそのころ、シンガポール国立大学で教鞭を執り、アジアを中心に国際的な建築家ネットワークを展開していた。このようにJIAには少数ではあるが国際派の会員が存在し、こつこつと独自の国際親善活動を展開してきたのである。

アルカシア大会は毎年開催されるアジア地域の一大建築イベントである。Asian Congress of Architects(アジア建築家会議:ACA)、ARCASIA Forum(アルカシアフォー

ラム:AF)はそれぞれ隔年に開催される。ACAは大型大会であり、AFは小規模の大会として位置付けられている。これまで17回のACAが開催されており、一方でAFは18回開催されている。大会は評議会とともに開催され、開催地は加盟国よりの立候補、評議会におけるプレゼンテーション、そして投票によって決定する。さまざまな国際会議と同様、アルカシア大会の開催は、各国から建築家や学識者たちが集結する影響力を持ったイベントなのである。

アルカシアは3ゾーンに区分され、Aゾーンはモンゴル、日本、中国、韓国、香港、マカオ、Bゾーンはフィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ラオス、そしてCゾーンはバングラデシュ、インド、パキスタン、スリランカ、ネパール、ブータンとなっている。さらに、現在ブルネイ、カンボジアなどが加盟を検討している。

● アルカシアの活動

アルカシアの規約には、「各国の建築家協会が、民主主義的な団結に基づき、アジア地域において友情、知性、芸術性、教育的、科学的な関係を促進することを目的とし、さらに加盟国の相互協力体制の樹立、建築家職能の確立、建築家の社会貢献の奨励、建築教育の促進、建築技術の研究と前進などを目指している」と記されている。

これらの目標を達成するにあたって、アルカシア加盟国同士のコミュニケーションが重要課題となる。現在、アルカシアでは教育委員会(ACAIE)、実務委員会(ACAP)、環境サステナブル委員会(ACGSA)、社会責任委員会(ACSR)、若手建築家委員会(ACYA)の5つの委員会が活動している。

■ アルカシア教育委員会(ACAIE)

アルカシア常設委員会のなかでACAIEが最も古く、アジアの地域建築文化の研究と拡散、建築教育の発展、各国の建築教育についてのデータベースの収集と管理、そして、学生・教員による交流などについての取り組みを行っている。特に学生の交流については、ACA大会年度に学生ジャンボリーを開催し、19カ国から学生代表を集めた建築ワークショップを開催している。ジャンボリーには150名あまりの学生が参加し、開催都市をテーマに学生たちが課題に対してチームで提案する。アジア各国から集まった学生たちの文化性豊かなプレゼンター

ションに、アルカシア評議会も毎回刺激を受けている。

ACAEは、アジア建築教育データバンクの完成にも力を入れている。内容はプログラム、カリキュラムなどを含む各国の建築教育機関の情報、学生数や卒業生の進路などを国ごとにまとめてACAEに報告するシステムである。これには、日本としてはJIAのみの資料ではインプットができない。そこで、近年、ACAEへの委員派遣を日本建築学会に委託している。2011年のUIA東京大会以来、JIAはこのような「オールジャパン」体制を国内建築五団体に呼びかけてきたが、アルカシアではこれが継続して行われている。

もうひとつACAEがテーマにしてきたのが、アジア地域独自の建築文化を共有するアルカシア的建築教育である。筆者がACAE委員長を務めた2003～04年には、インド、タイよりアルカシア建築大学の設立が提案されるまで関心度が高いテーマである。近年では、単位や科目履修の互換性などが協議され、各国の教育機関への意見聴取が進められている。

・アルカシア実務委員会 (ACAP)

ACAPは、2005年にタイ・チェンマイで開催された第26回評議会にて設置が承認された。ACAPのミッションは、アルカシアによる建築実務ガイドラインの設定である。アジア諸国では、建築家法、各国の建築基準法などが必ずしも法律化されているとはいえない。また、これらの法律、条令なども日々変遷が繰り返されている状態が見られる。建築職能の安定が約束された環境を構築するために、各国の建築家協会では建築家の社会的地位の向上を目指している。特に途上国の建築家協会にとって、アルカシアの存在は大きい。アルカシアでは、加盟国による建築家資格の相互承認、建築実務ガイドラインの構築とマニュアルの出版、CPD(継続職能教育)の普及などに取り組んでいる。

日本、韓国、シンガポール、マレーシア、香港などでは、他の加盟国と比較して建築職能環境が充実していることから、それぞれの建築家協会による建築実務の専門的アドバイスを提供するエキスパート・ファシリテーターシステムの導入などが協議されている。

アルカシアの存在はUIA(国際建築家連合)のPPC(実務委員会)においても大きい。委員長席にはAIA(アメリカ建築家協会)と並んで中国が座り、バングラデシュ、韓国、インド、日本などが参加している。従って、ACAPでは、UIAのPPCで取り組んできた課題をアジアの文脈で協議し、グローバルにフィードバックしているのである。

・アルカシア環境サステナブル委員会 (ACGSA)

ACGSAのミッションは、アジア各国において、地球環境のSustainability(持続性)とResilient(弾力性)に建築家が積極的に寄与できる職能環境の構築である。アジアでは、建築環境の性能評価システムがすでに設置されている国がある。日本のCASBEEを筆頭に、シンガポール(Green Mark)、マレーシア(GBI)、韓国(KGBC)、香港(BEAM)などの性能評価システムが機能しており、ACGSAでは情報交換とデータベースの構築を課題としている。また、委員会主催の持続性と弾力性をテーマにラウンドテーブルシンポジウムを開催し、アジアでの意識向上を推進している。アジアの自然環境は北の寒冷地から南は赤道直下の地域と幅広い気候ゾーンに属していることから、今後、ACGSAの担う役割はさらに重要な位置を占めるであろう。

・アルカシア社会責任委員会 (ACSR)

ACSRはアルカシアの最も新しい委員会である。ACSRは筆者が会長を務めた2011年度の評議会にて承認され、翌年正式に設置された。近年、日本でもCSRが脚光を浴びるようになり、企業の利益追求と並行してあらゆるステークホルダーを考慮した意思決定を行い、環境、人権、財政、政治の4項目に関する説明責任を果たすことが常識化してきている。アルカシアにおいても、UIAの影響を受け、長年UIA社会責任ワークプログラムでリーダーシップを取ってきた香港のジョセフ・クワン氏を迎えてACSRの骨格を構築した。ACSRでは災害復興対策、ユニバーサルデザイン、気候・環境変動など建築家が貢献できる分野において積極的に活動すること、特に公共福祉のためにボランティア精神で取り組むことを奨励し、協議を続けている。

2013～14年に会長を務めたマレーシアのタン・ベイイング氏によって、アルカシア大会の関連行事として社会責任シンポジウムが開催されるようになった。

・アルカシアフェローシップ

アルカシア評議会は加盟協会の会長で構成される会議である。各国の建築家協会と異なり、継続個人会員制ではない。従ってそれぞれの建築家協会の事情によりアルカシア大会時に開催される評議会ごとに構成員が入れ代わる。そのメリットは評議会そのものが発展的で有機的な会議となっており、それ故、アルカシアはエネルギーな建築職能団体といえよう。一方で、各国の代表として出席する建築家協会の会長がもつ豊富な知識や経験は短期間で「消費」されてしまう。多くの場合、未開拓



アルカシアアワード授与式

で交代していく。そこで、アルカシアでは、過去に評議会へデレゲートとして出席した経験のあるメンバーで構成されるアルカシアフェロシップ(AF)を設置した。40数年の歴史を誇るアルカシアには、多数の建築賢者たちが評議会の発展に貢献してきた。そして、評議会代表経験者たちは、アルカシアフェロシップをプラットフォームとして引き続きアジア建築界の発展について協議している。アルカシアフェロシップ、すなわち「アジアの連携を担う建築家の仲間」たちである。「共存、共有、協力」の思想、まさにアジア的発想である。

■ アルカシアアワード

アルカシアアワード(優秀建築賞)は、1991年に北京で行われた第12回評議会において承認され、翌年の1992年に、パキスタン・ラホールにて開催されたACA 5において第1回ゴールドメダル授賞式が行われた。アルカシアアワードでは、「建築作品におけるアジアスピリット(精神)の持続」、「アジアにおける建築環境の発展、そしてアジア諸国の建築家・建築設計界の経済・社会・文化環境への影響力の増大」を設置の主旨として上げている。そして、従来、加盟団体(日本はJIA)による推薦作品が応募対象となっていたが、審査が隔年から年度サイクルで行われるようになった2013年より、アジア地域の建築作品を対象作品として広く募集している。アルカシア大会において行われるアワード授与式は、アジアのみならず、世界各地から受賞者が出席する盛大な式典であり、ゴールドメダルは住宅部門から大型施設まで複数の部門にわたって審査される。特に日本から応募される建築作品は常に高い評価を受けており、歴代ゴールドメダル受賞者リストには、多くの日本人建築家その名を連ねている。

● アルカシアとの15年

私は、アメリカ在住時代に香港返還により、国際経済への期待と不安が同時に高まった時代を体験し、「21世紀はアジアの世紀」のスローガンを信じて、1997年にアメリカから日本に活動拠点を移した。ちょうどその年の9月に、AF 9が東京国際フォーラムにて開催された。非会員としてフォーラムを訪れたが、アメリカのアジアンコミュニティで活動してきた私にとって、アジアの建築家たちで組織されたアルカシアは魅力的であった。



2011年、第16回アルカシアフォーラム(AF、ベトナム)で挨拶される当時アルカシア会長の国広氏

このアルカシアとの出会いが私をJIAに入会させるきっかけとなった。JIA国際交流委員会の委員になり、1999年にソウルで開催されたアルカシア評議会に初めてJIA代表団の一員として参加し、AF 10に参加した。アジア建築界の発展のために、地域各地で日々活動を行っている建築家たちとともに会場となったソウルコンベンションセンターでアジアの現在、そして将来を語り合った。フォーラムの基調講演で登壇したアジアの著名なスピーカーたち、そしてアジアにおける建築作品賞の頂点であるアルカシアアワードの作品展などに興奮したのを記憶している。

そして、第20回評議会に出席し、当時の若手であった芦原太郎、岩村和夫、古谷誠章各氏とともに、それまで2年ごとに交代し、会議を超越した交流関係まで発展しないJIA代表団のイメージを一掃し、アジアにおいて「顔が見えるJIA」になろうと誓い合った。これを機に、私はほぼ毎年アルカシア大会に出席してきた。アルカシアでは、2003～04年に教育委員長を務め、2011年には第18代アルカシア会長に就任した。JIA代表として初めてのことであった。これまで、長島孝一、山本浩三、進来廉、椎名政夫、太田隆信各氏など国際派の諸先輩が尽力されてきた結果である。設立当時のJIAは、国際建築家連合(UIA)のメンバーであり、アルカシアにも加盟していながら、国内活動重視であったため国際派の会員たちが少数でJIAの国際交流を支えていた。私が聞くところによると、当時、JIAはアジアにおいての活動を消極的に行う、いわば「戦後コンプレックス症候群」であったようだ。つまり、あまりリーダーシップを取る立場に協会を置かないように努力したようである。しかし、一方で諸先輩の悲願であったUIA大会の誘致に向けて動き出したのも、私がJIAに入会した90年代末であった。途中幾度かの挫折を経験した末、UIA大会誘致委員会は2005年にイスタンブール大会において東京大会の誘致を勝ち取ったのであった。

当時、岩村氏とともに、総会の壇上で東京のプレゼンテーションを行った時の緊張と興奮も忘れられない。そして、2011年、UIA東京大会開会4ヵ月前に悲劇が起こった。東日本大震災である。この逆境の中JIAは「オールジャパン」の呼びかけで日本建築界とともに世界大会を無事に成功させたのである。これに先立ち、私のアルカシア会長選への立候補は必ずしも順調満帆ではなかつ



大会最終日に行われる「フレンドシップナイト」
(第18回AF アユタヤにて)

た。当時のJIA理事会は、膝下のアジアを超越し、グローバルを目指していた。そこで、アルカシア加盟諸国へUIA東京大会をアピールすることを公約として、JIA理事会の推薦を得ることができたが、ここでも、JIAにとってアルカシア、つまりアジアとの連携の必要性が問われたのである。

アルカシア役員は、次期会長、会長指名の顧問、そして会長補佐の書記と財務担当で構成される。アルカシアは常設本部が存在せず、会長により所属建築家協会の会員から書記と財務担当が指名を受ける。この三役が、任期の2年間持ち回りの執行部となる。私は書記にマルコ・コルベラ氏、財務担当には伊藤潤一氏をお願いした。彼らは本業の傍らしっかりと執行部の重要な任務を全うしてくれた。その貢献と功績には光るものがあつた。基本的にはJIA事務局はアルカシア会長の事務局として補助を行わない。したがって、記者会見などは私たち3名で手配し、JIA施設を借用して開催した。これも、いかにJIAがアルカシアにとって消極的であったかがうかがえる。私の会長時代にアルカシアは中長期計画を発表し、アフリカ建築家連合、中央アジア建築家連合、欧州建築家連合などとの協力協定を締結した。また、アルカシアの18カ国目となるラオスの加盟を実現させた。こうして、無事に2年間の任期を終え、2009年の会長選において僅差で次席となったマレーシアのタン・パイイグ氏が2011年の会長選では圧勝し、2013年第19代会長に就任した。

アルカシアの舵をとって最も印象的だったのは、アルカシアには国境を超えた「友情」があり、「協力の精神」がみなぎっているということだ。それは、大会最終日に行われる恒例の「フレンドシップナイト」で表面化する。19カ国の代表団によるカラフルなパフォーマンスで会場は湧き上がる。そして、歌唱パフォーマンスやダンスが始まると、会場から観客がステージに上がり、熱狂の中参加する。まさに友情と協力の精神である。アルカシアの発展と繁栄はこのアジアスピリットで支えられているのである。

● JIAとアルカシア：これからの10年

2015年11月に開催された第34回アルカシア評議会の席上、芦原太郎JIA会長は、日本が2018年に開催されるACAのホスト国を務める意向であることを伝えた。



アユタヤで開催されたアルカシア「フェアウェル・ディナー」で登壇した来賓の方々たち

芦原会長は、UIA東京大会当時、JIA会長として世界大会のホスト役を務め日本文化の「おもてなし」を世界にアピールした。その後、世界情勢は中国経済の躍進とアセアン経済共同体発足、さらにミャンマーの政権交代などの動きに影響され、グローバル社会ではアジアへの注目度が高まっている。JIAの国際方針も、グローバルよりもむしろアジアとの交流を軸にするように方向転換が行われつつある。このような状況下、建築界においてアルカシアの位置付けが重要視されるようになってきた。アルカシアは、アジア建築界のプラットフォームである。現在19カ国の加盟国を誇り、情報交換の場のみならず、環境問題、社会責任、災害対応、対政府ロビー活動など、アルカシアの影響力は年々増大の傾向にある。

一方、経済、人口などが縮小するなか、日本は「ものづくり大国」のタイトルを維持し、「観光大国」を目指すことで繁栄を持続していく方針を進めている。これは、建築界の存在意義と重複する。ACAを2018年に日本にて開催することで、再び「おもてなし」で国内の観光資源をアピールし、東北の復興や国内各地の再開発事例などで、日本のものづくり文化の現状を紹介する機会が生まれる。さらに災害緊急時における日本建築界の豊富な経験などがアジア地域では注目されており、「3.11」以降の復興事例などがアジア各国の貴重な資料となることは間違いない。

今年のAFは9月に香港で開催される。この第37回評議会において2018年のACA開催国が選出される。JIAは国際事業としてACA開催国となるようプレゼンテーションの準備を進めている。日本のこれからの10年は、アジア抜きにしては考えられないであろう。

参考文献

- ARCASIA History Book Committee, ARCASIA, Architects Regional Council Asia, UAP, Philippines, 2007
- Architects Regional Council Asia, <http://www.arcasia.org/home>